

ART ESSAY

アート★エッセイ

自分の感性に素直に

YOKO増田静江
(ニキ美術館館長)



「こらッ、絵はマンガじゃないぞ！」
ふいに頭の上でS先生の怒声が炸裂した、と思ったら鉄拳で私の小さな頭ははりとばされていた。イタツと頭をかばう間もなく「立ってろ！」邪険に襟首をつかまれた。小学校1年生の自由画の時間のことだった。発育不良で、頭のまわりも鈍かった私には、何が起こったのかとっさに判断ができなかった。それまで絵なんか描いたことのない私が、「何でも好きなものを描く時間だ」といわれて、ないチ工をふりしぼって金魚屋さんを描いたのだ。子ども特有の線画に、「きんぎょやーい」と吹き出しまでつけていた。

無知にして無心な幼児が、のっけからこのような目にあうとどうなるか。6歳の私は「凶画」というものにすっかり怯えて、以来この時間に先生がまわってくると、画用紙を両手でおおって体を伏せ、描いたものを見られまいとした。結果は同じだった。「挙動不審である」私の体は乱暴に引き起こされて、廊下に、教卓の傍にと立たされた。

思い出してみると、明日が小学校の卒業式であるという6年生最後の凶画の時間にも、私は廊下で立って過ごしたのだった。

こんなことのためか、以来、私にとって「芸術」とは遠いあちらの世界に過ぎなかった。セザンヌ？ ピカソ？ マチス？ だから何なの？ という心情だった。けれども、年齢50歳になって、ニキ・ド・サンファルというフランスの女性造形作家の作品に出会ったとき、私は「自分に出会った！」と思った。ニキは、心から喜び、怒り、実に自由だった。ありのままの自分を誇らかにうたうニキの作品に、私はすっかり圧倒され、魅了された。

現在、私は那須高原で、ニキの作品のみを蒐めたるニキ美術館を運営している。私が「芸術」について「無知」だったから、50歳になっても自分の感性に素直でいられたからそれができたのだ、でなければ「ニキを蒐めるなんて無謀なこと」はできるはずがなかった、と人に言われ、自分でもつくづくそうかもしれないと思っている。

(YOKOますだしずえ)



みんなで「ナナ」になろう！
〔「ナナ」とはニキの作品に表される女性像〕